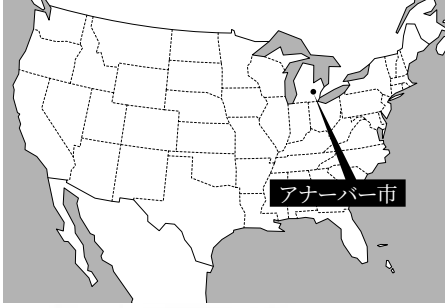

先生たちの見たアナーバーの③

姉妹都市学校事情

外国の教育事情や文化、生活習慣などに直接触れ、国境を越えた広い視野で新しい教育を見つけるよう、市教育委員会では市内の先生たちを海外へ研修派遣しています。昨年は、10月21日から11月3日までの14日間、市内の小学校の先生3人が、姉妹都市アナーバーでアメリカの教育を学んできました。

先生たちが見たこと、聞いたことを紹介していただきます。

問い合わせ先　市教育委員会学校教育課
☎㉔7971番、FAX㉓9190番

アメリカの多文化教育

城東小学校教諭　大澤厚美

アナーバー市の小学校の教室では、いろいろな国の文化を持った子どもたちがともに生活しています。教室に入って子どもたちのきらきらと輝く瞳を見ると、一人ひとりの存在が大切にされていることが分かります。

どの小学校の先生も口をそろえて言われることは、「個人の尊重」です。文化、宗教、肌の色、髪の色など、みんな違って当たり前の社会だから、一人ひとりの個人を尊重することが、教育の基盤に流れていると感じました。

自分に自信を持つことがすべてのスタート

訪問した小学校のほとんどで、子どもたちの学力向上を学校教育の大きな目標にしていました。そこで基本になる考え方は、「子どもたちが自分の力を出し切って、心地よい気持ちを感じることが能力向上につながる」というものです。そのため、各学校では、子どもたちが「自分が好き」という感情を持ち、自分に自信を持てるよう、学校を学ぶ喜びのある居心地のよい場所にしようと独自の工夫がされていました。中学校カウンセラーの先生のおっしゃった「自分が価値ある人間であることを認め、自分に自信を持つことが、すべてのスタートである。」という言葉が今も心に残っています。

学年を超えて、いっしょにゲームで楽しむ子どもたち

自分だけの「宝島」を作る

アナーバー市では、音楽や体育、美術の教育に力を入れていました。絵を描く、ものを作る、仲間といっしょに歌を歌うといったものが、自己表現の学習として位置づけられています。オーケストラの一員として演奏する音楽の授業、ヨガを取り入れた体育の授業などユニークな取り組みが見られました。特に、「宝島の地図を作ろう」という授業は、いろいろな地図を参考に、子どもたちが自分だけの「宝島」を作り出すもので、世界のさまざまな地域への関心を育てながら想像力をはぐくむ、すばらしいものでした。

自分を表現し、自分を主張していく

また、読むことの学習も、とても重要視されています。ローガン小学校では、学校の中心に図書館があり、その周りに各教室が配置されていました。たいていの小学校は、昼食の後、30分の読書タイムが設けられ、子どもたちは本に親しんでいます。また、読書の苦手な子どものために、個別指導などが導入されていました。

ダンスを通して子どもたちと触れ合いました

「読むこと」と同時に、「書くこと」も大切にされていました。自分でテーマを決めて、物語などの創作作文を書いたり、自分のことを相手に伝える「自分物語」を書くことも、小学校の低学年から取り組まれていました。言葉で自分を表現し、自分の意見を主張していくという、アメリカ教育の目指すところが感じられました。

「アメリカは大きかった」といろんな意味で感じた研修でした。どこに行っても、だれと会っても、彦根からやって来た私たちを大歓迎してくださり、ただただ驚くばかりでした。大きな心で受け入れられることが、どれだけ人間を大きくするのかを肌で感じました。七つの小・中学校を訪問し、たくさんの子どもたちと知り合えたことは、忘れられません。

アメリカで学んだことを生かして、一人ひとりの子どもの良さを受け止め、子どもたちが自分の夢や目標を見つけて、自己実現できるような教育を目指していきたい、と考えています。